

Citation: Cahill K, Stead LF, Lancaster T. Nicotine receptor partial agonists for smoking cessation. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2008, Issue 3. Art. No.: CD006103. DOI: 10.1002/14651858.CD006103.pub3.

CRG名: Tobacco Addiction

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 14 March 2008

Clib issue No.; N/U: 2009 issue 1, Updated

背景: ニコチン受容体部分的作用薬は離脱症状を弱める適度なドーパミンの維持(作用薬としての作用)と喫煙満足感の減少(拮抗薬としての作用)という2つの作用の組み合わせによって禁煙者の助けになるかもしれない。バレニクリンは中央および東ヨーロッパで禁煙に広く用いられているシチシンをもとにして、ニコチン受容体部分的作用薬として開発された。バレニクリンに関する最初の臨床試験の報告が2006年に発表され、その後新たな試験結果が発表されたり、試験が進行中である。

目的: このレビューの主な目的は、禁煙におけるバレニクリンやシチシンなどのニコチン受容体部分的作用薬の有効性と忍容性を評価することである。

検索戦略: タイトル、アブストラクト、およびキーワードに対し用語(バレニクリン、シチシン、Tabexもしくはニコチン受容体部分的作用薬)を用いて、臨床試験が特別に登録されたCochrane Tobacco Addiction Groupを検索した。MEDLINE、EMBASE、PSYCLINFOおよびCINAHLに関してもMeSH termと全文検索を行った、そして必要に応じ、さらなる情報のため試験報告書の著者に連絡を取った。最終検索は2008年3月。

選択基準: プラセボと治療薬を比較したランダム化比較試験を含めた。使用可能な場所で行われたブプロピオンとニコチンパッチとの比較試験も含めた。治療開始後6か月という最短の追跡結果を報告していない試験を除外した。

データ収集と分析: 参加者の種類、治療の投与量および期間、アウトカム指標、ランダム化の手順、割りつけのコンシールメント、追跡の完全性に関するデータを重複して抽出した。主に計測された結果は治療開始後少なくとも6か月以降の禁煙状況であった。私たちは最も厳密な禁煙の定義と報告され推奨されている生化学的に確認された禁煙率を用いた。必要に応じてリスク比を出すためにマンテルヘンツェルの固定効果モデルを用いてメタアナリシスを行った。

主な結果: 禁煙に対するプラセボと比較したバレニクリンの7の試験を見つけた、そのうち3つはブプロピオンを実薬群に含んでいた。プラセボとバレニクリンを比較した再発防止の試験を1つ見つけた。ニコチン置換療法とバレニクリンを比較した1つの非盲検化試験を見つけた。9の試験は7,267人の参加者を対象としており、そのうち4,744人はバレニクリンを使用していた。シチシン(Tabex)を含んだ1つの試験を特定した。バレニクリン対プラセボの6か月以上持続した禁煙成功のプールされたリスク比(RR)は2.33(95%信頼区間 1.95~2.80)であった。1年後の時点でのバレニクリン対ブプロピオンのプールされたRRは1.31(95%信頼区間1.22~1.88)であった。1年後の時点でのバレニクリン対NRTのRRは1.31(95%信頼区間 1.01~1.71)であった。12週の標準治療を超えバレニクリンを使用した2つの試験は、長期間使用において良好な忍容性を持つ薬であることを明らかにした。バレニクリンの主な有害作用は吐気であり、多くの場合、軽度から中程度であり、時間とともに軽減した。市販後の安全データはバレニクリンが抑うつ気分、興奮、自殺行動や自殺念慮と関連があるかもしれないことを示唆している。バレニクリンのラベルは修正され、FDAが安全審査を実施している。今回のレビューに含まれている1つのシチシンに関する試験は2年間の追跡調査でシチシンを服用している参加者がプラセボと比較して、より多く禁煙していること、すなわちRR1.61(95%信頼区間 1.24~2.08)を明らかにした。

レビューアの結論: バレニクリンは薬理学的に助けのない禁煙と比較して2~3倍の長期の禁煙成功の可能性を増加させている。より多くの参加者がブプロピオンよりバレニクリンを用いて禁煙に成功した。1つのバレニクリン対ニコチン補充療法に関する非盲検化試験はバレニクリンの軽度の優越性を明らかにした。再発防止の補助と

Copyright (c) All rights reserved by Minds, Japan Council for Quality Health Care
してのバレニクリンの有効性は明らかには証明されていない。バレニクリンの主な有害作用は吐気であるが、多くの場合軽度から中程度であり時間と共に軽減した。抑うつ気分、興奮、および自殺願望を含む重篤な有害作用との関係の可能性は現在検討されている。様々な併存疾患やリスクを持った喫煙者における有効性と安全性を調査するため、バレニクリンの独立した地域ベースの試験が必要である。12週を超えた治療の有効性に対するさらなる試験が必要である。シチシンも禁煙の可能性を高めるかもしれないが、現時点におけるエビデンスからは結論づけはできない。

(翻訳 祖父江尊範・監訳 中村正和; JCOHR)
翻訳公開日: 10年7月1日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは毎月、改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。